

## 夜間支援等体制加算の見直しについて（共同生活援助（介護サービス包括型・外部サービス利用型））

見直し後	現行
イ 夜間支援等体制加算（Ⅰ）	イ 夜間支援等体制加算（Ⅰ）
(1) 夜間及び深夜の時間帯において、世話人又は生活支援員等が支援を行う利用者（以下この1の5において「夜間支援対象利用者」という。）が2人以下	(1) 夜間及び深夜の時間帯において、世話人又は生活支援員等が支援を行う利用者（以下この1の5において「夜間支援対象利用者」という。）が2人以下 <u>672 単位</u>
(一) 区分4以上 <u>672 単位</u>	(新設)
(二) 区分3 <u>560 単位</u>	(新設)
(三) 区分2以下 <u>448 単位</u>	(新設)
(2) 夜間支援対象利用者が3人	(2) 夜間支援対象利用者が3人 <u>448 単位</u>
(一) 区分4以上 <u>448 単位</u>	(新設)
(二) 区分3 <u>373 単位</u>	(新設)
(三) 区分2以下 <u>299 単位</u>	(新設)
(3) 夜間支援対象利用者が4人	(3) 夜間支援対象利用者が4人 <u>336 単位</u>
(一) 区分4以上 <u>336 単位</u>	(新設)
(二) 区分3 <u>280 単位</u>	(新設)
(三) 区分2以下 <u>224 単位</u>	(新設)
(4) 夜間支援対象利用者が5人	(4) 夜間支援対象利用者が5人 <u>269 単位</u>
(一) 区分4以上 <u>269 単位</u>	(新設)
(二) 区分3 <u>224 単位</u>	(新設)
(三) 区分2以下 <u>179 単位</u>	(新設)
(5) 夜間支援対象利用者が6人	(5) 夜間支援対象利用者が6人 <u>224 単位</u>
(一) 区分4以上 <u>224 単位</u>	(新設)
(二) 区分3 <u>187 単位</u>	(新設)
(三) 区分2以下 <u>149 単位</u>	(新設)
(6) 夜間支援対象利用者が7人	(6) 夜間支援対象利用者が7人 <u>192 単位</u>
(一) 区分4以上 <u>192 単位</u>	(新設)
(二) 区分3 <u>160 単位</u>	(新設)

(三) 区分2以下	128 単位	(新設)	
(7) 夜間支援対象利用者が8人		(7) 夜間支援対象利用者が8人以上10人以下	149 単位
(一) 区分4以上	168 単位	(新設)	
(二) 区分3	140 単位	(新設)	
(三) 区分2以下	112 単位	(新設)	
(8) 夜間支援対象利用者が9人		(新設)	
(一) 区分4以上	149 単位		
(二) 区分3	124 単位		
(三) 区分2以下	99 単位		
(9) 夜間支援対象利用者が10人		(新設)	
(一) 区分4以上	135 単位		
(二) 区分3	113 単位		
(三) 区分2以下	90 単位		
(10) 夜間支援対象利用者が11人		(8) 夜間支援対象利用者が11人以上13人以下	112 単位
(一) 区分4以上	122 単位	(新設)	
(二) 区分3	102 単位	(新設)	
(三) 区分2以下	81 単位	(新設)	
(11) 夜間支援対象利用者が12人		(新設)	
(一) 区分4以上	112 単位		
(二) 区分3	93 単位		
(三) 区分2以下	75 単位		
(12) 夜間支援対象利用者が13人		(新設)	
(一) 区分4以上	103 単位		
(二) 区分3	86 単位		
(三) 区分2以下	69 単位		
(13) 夜間支援対象利用者が14人		(9) 夜間支援対象利用者が14人以上16人以下	90 単位
(一) 区分4以上	96 単位	(新設)	
(二) 区分3	80 単位	(新設)	
(三) 区分2以下	64 単位	(新設)	
(14) 夜間支援対象利用者が15人		(新設)	
(一) 区分4以上	90 単位		
(二) 区分3	75 単位		
(三) 区分2以下	60 単位		
(15) 夜間支援対象利用者が16人		(新設)	

(一) 区分4以上	84 単位		
(二) 区分3	70 単位		
(三) 区分2以下	56 単位		
(16) 夜間支援対象利用者が17人		(10) 夜間支援対象利用者が17人以上20人以下	75 単位
(一) 区分4以上	79 単位	(新設)	
(二) 区分3	66 単位	(新設)	
(三) 区分2以下	53 単位	(新設)	
(17) 夜間支援対象利用者が18人		(新設)	
(一) 区分4以上	75 単位		
(二) 区分3	63 単位		
(三) 区分2以下	50 単位		
(18) 夜間支援対象利用者が19人		(新設)	
(一) 区分4以上	71 単位		
(二) 区分3	59 単位		
(三) 区分2以下	47 単位		
(19) 夜間支援対象利用者が20人		(新設)	
(一) 区分4以上	67 単位		
(二) 区分3	56 単位		
(三) 区分2以下	45 単位		
(20) 夜間支援対象利用者が21人（夜間支援対象利用者が同一の共同生活援助を行う住居（以下「共同生活住居」という。）に入居している場合に限る。）		(11) 夜間支援対象利用者が21人以上30人以下（夜間支援対象利用者が同一の共同生活援助を行う住居（以下「共同生活住居」という。）に入居している場合に限る。）	54 単位
(一) 区分4以上	64 単位	(新設)	
(二) 区分3	53 単位	(新設)	
(三) 区分2以下	43 単位	(新設)	
(21) 夜間支援対象利用者が22人（夜間支援対象利用者が同一の共同生活住居に入居している場合に限る。）		(新設)	
(一) 区分4以上	61 単位		
(二) 区分3	51 単位		
(三) 区分2以下	41 単位		
(22) 夜間支援対象利用者が23人（夜間支援対象利用者が同一の共同生活住居に入居している場合に限る。）		(新設)	
(一) 区分4以上	58 単位		
(二) 区分3	48 単位		

(三) 区分2以下	39 単位	
(23) 夜間支援対象利用者が24人（夜間支援対象利用者が同一の共同生活住居に入居している場合に限る。）		(新設)
(一) 区分4以上	56 単位	
(二) 区分3	47 単位	
(三) 区分2以下	37 単位	
(24) 夜間支援対象利用者が25人（夜間支援対象利用者が同一の共同生活住居に入居している場合に限る。）		(新設)
(一) 区分4以上	54 単位	
(二) 区分3	45 単位	
(三) 区分2以下	36 単位	
(25) 夜間支援対象利用者が26人（夜間支援対象利用者が同一の共同生活住居に入居している場合に限る。）		(新設)
(一) 区分4以上	51 単位	
(二) 区分3	43 単位	
(三) 区分2以下	34 単位	
(26) 夜間支援対象利用者が27人（夜間支援対象利用者が同一の共同生活住居に入居している場合に限る。）		(新設)
(一) 区分4以上	50 単位	
(二) 区分3	42 単位	
(三) 区分2以下	33 単位	
(27) 夜間支援対象利用者が28人（夜間支援対象利用者が同一の共同生活住居に入居している場合に限る。）		(新設)
(一) 区分4以上	48 単位	
(二) 区分3	40 単位	
(三) 区分2以下	32 単位	
(28) 夜間支援対象利用者が29人（夜間支援対象利用者が同一の共同生活住居に入居している場合に限る。）		(新設)
(一) 区分4以上	46 単位	
(二) 区分3	38 単位	
(三) 区分2以下	31 単位	
(28) 夜間支援対象利用者が30人（夜間支援対象利用者が同一の共同生活住居に入居している場合に限る。）		(新設)
(一) 区分4以上	45 単位	

(二) <u>区分3</u>	38 単位		
(三) <u>区分2以下</u>	30 単位		
□ 夜間支援等体制加算(Ⅱ)		□ 夜間支援等体制加算(Ⅱ)	
(1) 夜間支援対象利用者が4人以下	112 単位	(1) 夜間支援対象利用者が4人以下	112 単位
(2) 夜間支援対象利用者が5人	90 単位	(2) 夜間支援対象利用者が5人	90 単位
(3) 夜間支援対象利用者が6人	75 単位	(3) 夜間支援対象利用者が6人	75 単位
(4) 夜間支援対象利用者が7人	64 単位	(4) 夜間支援対象利用者が7人	64 単位
(5) 夜間支援対象利用者が8人	56 単位	(5) 夜間支援対象利用者が8人以上10人以下	50 単位
(6) 夜間支援対象利用者が9人	50 単位	(新設)	
(7) 夜間支援対象利用者が10人	45 単位	(新設)	
(8) 夜間支援対象利用者が11人	40 単位	(6) 夜間支援対象利用者が11人以上13人以下	37 単位
(9) 夜間支援対象利用者が12人	37 単位	(新設)	
(10) 夜間支援対象利用者が13人	34 単位	(新設)	
(11) 夜間支援対象利用者が14人	32 単位	(7) 夜間支援対象利用者が14人以上16人以下	30 単位
(12) 夜間支援対象利用者が15人	30 単位	(新設)	
(13) 夜間支援対象利用者が16人	28 単位	(新設)	
(14) 夜間支援対象利用者が17人	26 単位	(8) 夜間支援対象利用者が17人以上20人以下	25 単位
(15) 夜間支援対象利用者が18人	25 単位	(新設)	
(16) 夜間支援対象利用者が19人	23 単位	(新設)	
(17) 夜間支援対象利用者が20人	22 単位	(新設)	
(18) 夜間支援対象利用者が21人(夜間支援対象利用者が同一の共同生活住居に入居している場合に限る。)	21 単位	(9) 夜間支援対象利用者が21人以上30人以下(夜間支援対象利用者が同一の共同生活住居に入居している場合に限る。)	18 単位
(19) 夜間支援対象利用者が22人(夜間支援対象利用者が同一の共同生活住居に入居している場合に限る。)	20 単位	(新設)	
(20) 夜間支援対象利用者が23人(夜間支援対象利用者が同一の共同生活住居に入居している場合に限る。)	19 単位	(新設)	
(21) 夜間支援対象利用者が24人(夜間支援対象利用者が同一の共同生活住居に入居している場合に限る。)	18 単位	(新設)	
(22) 夜間支援対象利用者が25人(夜間支援対象利用者が同一の共同生活住居に入居している場合に限る。)	18 単位	(新設)	
(23) 夜間支援対象利用者が26人(夜間支援対象利用者が同一の共同生活住居に入居している場合に限る。)	17 単位	(新設)	
(24) 夜間支援対象利用者が27人(夜間支援対象利用者が同一の共		(新設)	

同生活住居に入居している場合に限る。)	16 単位	
(25) 夜間支援対象利用者が 28 人 (夜間支援対象利用者が同一の共 同生活住居に入居している場合に限る。)	16 単位	(新設)
(26) 夜間支援対象利用者が 29 人 (夜間支援対象利用者が同一の共 同生活住居に入居している場合に限る。)	15 単位	(新設)
(27) 夜間支援対象利用者が 30 人 (夜間支援対象利用者が同一の共 同生活住居に入居している場合に限る。)	15 単位	(新設)
ハ (略)		ハ (略)
三 夜間支援等体制加算(IV)		(新設)
(1) 夜間支援対象利用者が 15 人以下	60 単位	
(2) 夜間支援対象利用者が 16 人	56 単位	
(3) 夜間支援対象利用者が 17 人	53 単位	
(4) 夜間支援対象利用者が 18 人	50 単位	
(5) 夜間支援対象利用者が 19 人	47 単位	
(6) 夜間支援対象利用者が 20 人	45 単位	
(7) 夜間支援対象利用者が 21 人	43 単位	
(8) 夜間支援対象利用者が 22 人	41 単位	
(9) 夜間支援対象利用者が 23 人	39 単位	
(10) 夜間支援対象利用者が 24 人	37 単位	
(11) 夜間支援対象利用者が 25 人	36 単位	
(12) 夜間支援対象利用者が 26 人	34 単位	
(13) 夜間支援対象利用者が 27 人	33 単位	
(14) 夜間支援対象利用者が 28 人	32 単位	
(15) 夜間支援対象利用者が 29 人	31 単位	
(16) 夜間支援対象利用者が 30 人	30 単位	
ホ 夜間支援等体制加算(V)		(新設)
(1) 夜間支援対象利用者が 15 人以下	30 単位	
(2) 夜間支援対象利用者が 16 人	28 単位	
(3) 夜間支援対象利用者が 17 人	26 単位	
(4) 夜間支援対象利用者が 18 人	25 単位	
(5) 夜間支援対象利用者が 19 人	23 単位	

(6) 夜間支援対象利用者が 20 人	22 単位	
(7) 夜間支援対象利用者が 21 人	21 単位	
(8) 夜間支援対象利用者が 22 人	20 単位	
(9) 夜間支援対象利用者が 23 人	19 単位	
(10) 夜間支援対象利用者が 24 人	18 単位	
(11) 夜間支援対象利用者が 25 人	18 単位	
(12) 夜間支援対象利用者が 26 人	17 単位	
(13) 夜間支援対象利用者が 27 人	16 単位	
(14) 夜間支援対象利用者が 28 人	16 単位	
(15) 夜間支援対象利用者が 29 人	15 単位	
(16) 夜間支援対象利用者が 30 人	15 単位	
△ 夜間支援等体制加算 (VI)		(新設)
(1) 夜間支援対象利用者が 15 人以下	30 単位	
(2) 夜間支援対象利用者が 16 人	28 単位	
(3) 夜間支援対象利用者が 17 人	26 単位	
(4) 夜間支援対象利用者が 18 人	25 単位	
(5) 夜間支援対象利用者が 19 人	23 単位	
(6) 夜間支援対象利用者が 20 人	22 単位	
(7) 夜間支援対象利用者が 21 人	21 単位	
(8) 夜間支援対象利用者が 22 人	20 単位	
(9) 夜間支援対象利用者が 23 人	19 単位	
(10) 夜間支援対象利用者が 24 人	18 単位	
(11) 夜間支援対象利用者が 25 人	18 単位	
(12) 夜間支援対象利用者が 26 人	17 単位	
(13) 夜間支援対象利用者が 27 人	16 単位	
(14) 夜間支援対象利用者が 28 人	16 単位	
(15) 夜間支援対象利用者が 29 人	15 単位	
(16) 夜間支援対象利用者が 30 人	15 単位	
注 1～3 (略)		注 1～3 (略)
4 ニについては、イの夜間支援等体制加算 (I) を算定している指定共同生活援助事業所等であって、更に夜勤を行う夜間支援従事者を配置し、同加算の算定対象となる夜勤を行う夜間支援従事者を 1 名配置する共同生活住居に巡回させることにより、利用者に		(新設)

対して夜間及び深夜の時間帯を通じて必要な介護等の支援を提供できる体制を確保しているものとして都道府県知事が認めた指定共同生活援助事業所等において、指定共同生活援助等を行った場合に、夜間支援対象利用者の数に応じ、1日につき所定単位数を加算する。

5 ホについては、イの夜間支援等体制加算(I)を算定している指定共同生活援助事業所等であって、更に夜勤を行う夜間支援従事者を配置し、同加算の算定対象となる夜勤を行う夜間支援従事者を1名配置する共同生活住居に巡回させることにより、利用者に対して夜間及び深夜の一部の時間帯において必要な介護等の支援を提供できる体制を確保しているものとして都道府県知事が認めた指定共同生活援助事業所等において、指定共同生活援助等を行った場合に、夜間支援対象利用者の数に応じ、1日につき所定単位数を加算する。ただし、ニの夜間支援等体制加算(IV)の算定対象となる利用者については、算定しない。

(新設)

6 ヘについては、イの夜間支援等体制加算(I)を算定している指定共同生活援助事業所等であって、更に宿直を行う夜間支援従事者を配置し、同加算の算定対象となる夜勤を行う夜間支援従事者を1名配置する共同生活住居に巡回させることにより、利用者に対して夜間及び深夜の時間帯を通じて、定時的な居室の巡回や緊急時の支援等を提供できる体制を確保しているものとして都道府県知事が認めた指定共同生活援助事業所等において、指定共同生活援助等を行った場合に、夜間支援対象利用者の数に応じ、1日につき所定単位数を加算する。ただし、ニの夜間支援等体制加算(IV)又はホの夜間支援等体制加算(V)の算定対象となる利用者については、算定しない。

(新設)



契約内容（障害福祉サービス受給者証記載事項）報告書

年 月 日

〒 700 - 8546  
岡山市鹿田町一丁目1-1  
保健福祉会館7階 障害福祉課

岡山市長 様

事業者番号										
事業者及びその事業所の名称 代表者	印									

下記のとおり当事業者との契約内容（障害福祉サービス受給者証記載事項）について報告します。

記

報告対象者

受給者証番号									
支給決定障害者（保護者）氏名						支給決定に係る障害児氏名			

契約締結又は契約内容変更による契約支給量等の報告

受給者証の事業者記入欄の番号	サービス内容	契約支給量	契約日及びサービス提供開始日 <small>(又は契約支給量を変更した日)</small>	理由
				<input type="checkbox"/> 1 新規契約
				<input type="checkbox"/> 2 契約の変更
				<input type="checkbox"/> 1 新規契約
				<input type="checkbox"/> 2 契約の変更
				<input type="checkbox"/> 1 新規契約
				<input type="checkbox"/> 2 契約の変更
				<input type="checkbox"/> 1 新規契約
				<input type="checkbox"/> 2 契約の変更

既契約の契約支給量によるサービス提供を終了した報告

提供を終了する事業者記入欄の番号	提供終了日	提供終了月中の終了日までの既提供	既契約の契約支給量でのサービス提供を終了する理由
			<input type="checkbox"/> 1 契約の終了
			<input type="checkbox"/> 2 契約の変更
			<input type="checkbox"/> 1 契約の終了
			<input type="checkbox"/> 2 契約の変更
			<input type="checkbox"/> 1 契約の終了
			<input type="checkbox"/> 2 契約の変更
			<input type="checkbox"/> 1 契約の終了
			<input type="checkbox"/> 2 契約の変更

市町村記入欄

・データ入力年月日

年 月 日

受付印

	障障発第 0402001 号	平成 19 年 4 月 2 日
一部改正	障障発第 0518001 号	平成 19 年 5 月 18 日
一部改正	障障発第 0328002 号	平成 20 年 3 月 28 日
一部改正	障障発第 0331006 号	平成 21 年 3 月 31 日
一部改正	障障発 0928 第 1 号	平成 23 年 9 月 28 日
一部改正	障障発 0330 第 6 号	平成 24 年 3 月 30 日
一部改正	障障発 0727 第 1 号	平成 24 年 7 月 27 日
一部改正	障障発 0329 第 7 号	平成 25 年 3 月 29 日
一部改正	障障発 0331 第 3 号	平成 27 年 3 月 31 日
一部改正	障障発 0904 第 1 号	平成 27 年 9 月 4 日
一部改正	障障発 0331 第 8 号	平成 29 年 3 月 31 日
最終改正	障障発 0410 第 1 号	平成 30 年 4 月 10 日

各都道府県障害保健福祉主管部（局）長 殿

厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部  
障害福祉課長

就労移行支援事業、就労継続支援事業（A型、B型）における  
留意事項について

口頭より障害保健福祉行政に御協力いただき、感謝申し上げます。

さて、今般、障害者の就労支援を推進するため、障害者自立支援法（平成 17 年法律第 123 号。平成 25 年 4 月から障害者の日常生活及び社会生活を総合的に支援

するための法律）により就労移行支援、就労継続支援（A型、B型）を創設するとともに、現行の施設についても工賃実績の報告などを求めることとしたところで

す。つきましては、これらの事業の実施にあたって、下記の点に御留意いただきますようお願い申し上げます。

なお、本通知については職業安定局雇用開発部及び人材開発統括官と協議済みであることを申し添えます。

## 記

### 1 工賃（賃金）実績報告について

工賃（賃金）実績については、下記の内容に留意し、報告すること。

#### (1) 工賃（賃金）の範囲

ここでいう工賃（賃金）とは、工賃、賃金、給与、手当、賞与その他名称を問わず、事業者が利用者に支払うすべてのものをいう。

なお、工賃（賃金）は、原則として、生産活動に係る事業の収入から生産活動に係る事業に必要な経費（利用者に支払う工賃（賃金）を除く。）を控除した額に相当する金額を支払うことに留意すること。

#### (2) 工賃（賃金）実績の報告内容（事業所から各都道府県（指定都市にあっては都道府県及び指定都市、中核市にあっては都道府県及び中核市）への報告）

前年度の工賃（賃金）実績の平均額（時間当たりの工賃（以下「時間額」という。）、1日当たりの工賃（以下「日額」という。）、1月当たりの工賃（以下「月額」という。）から選択）

なお、時間額及び日額で報告のあった事業所については、国への報告は時間額及び月額であるため、各月の各日毎または各日の各時間毎の工賃（賃金）支払対象延べ人数や開所日数及び時間等も併せて報告を受けること。

#### (3) 事業所毎の平均工賃（賃金）の算定方法（事業所から各都道府県（指定都市にあっては都道府県及び指定都市、中核市にあっては都道府県及び中核市）への報告）

本算定結果は、平成 30 年度に創設される障害福祉サービス等の情報公表制度において、事業者情報として幅広く公表されるものであることから、利用者の利用状況にばらつきがある場合など、事業所の利用実態を考慮し、下記の算定方法から選択して報告すること。

##### ① 平均工賃（賃金）月額を算定して報告する場合

ア 報告対象年度各月の工賃（賃金）支払対象者の総数を算出

(例：50人定員で、工賃支払い対象者が、4月45人、5月50人、6月48人、7月50人、8月50人、9月50人、10月49人、11月50人、12月45人、1月47人、2月50人、3月50人の場合は、  
45+50+48+50+50+50+49+50+45+47+50+50=584人となる。)

イ 報告対象年度に支払った工賃（賃金）総額を算出

ウ イ÷アにより1人あたり平均月額工賃（賃金）額を算出

② 平均工賃（賃金）日額を算定して報告する場合

ア 各月の各日毎の工賃（賃金）支払対象者の延べ人数を毎月毎に算出

イ 上記により算出した全ての月の延べ人数を合計

ウ 対象年度に支払った工賃（賃金）総額を算出

エ ウ÷イにより1人あたり平均工賃（賃金）日額を算出

③ 平均工賃（賃金）時間額を算定して報告する場合

ア 各日の各時間毎の工賃（賃金）支払対象者の延べ人数を各日毎に算出

イ 上記により算出した全ての日の延べ人数を合計

ウ 対象年度に支払った工賃（賃金）総額を算出

エ ウ÷イにより1人あたり平均工賃（賃金）時間額を算出

(4) 各都道府県の平均工賃（賃金）額の算定方法（各都道府県から当該への報告）

平均工賃（賃金）額は月額及び時間額とし、上記(3)①により算定したものを都道府県の平均額とする。

(5) 申請時期及び申請先

① 各事業者は、毎年4月に、都道府県に対し前年度の工賃（賃金）実績を報告すること。

② 都道府県は、上記①により報告された工賃（賃金）実績を、毎年6月末日までに当該に対し報告すること。

(6) 工賃実績の公表方法

都道府県は、提出された工賃（賃金）実績及び都道府県全体又は圏域全体の平均工賃（賃金）額を、広報紙、ホームページ、WAMNET等により幅広く公表すること。

2 各種雇用関係助成金との関係について

事業所が実施する各事業で受入先事業所が受けられる各種雇用関係助成金等との関係は下記のとおりである。

ただし、助成金等にはこの他にも支給要件があることから、その申請にあたっては各助成金等の支給要件を確認すること。

なお、障害者を施設職員として雇用する場合は、下記によらず、雇用の形態により一般の事業所と同様に雇用関係助成金の申請が可能であるので留意すること。ただし、障害者雇用安定助成金（障害者職場適応援助コース）の対象となる企業内籍型職場適応援助に係る支給を受けようとする場合、事業所に企業内籍型職場適応援助者を配置するに当たっては、各事業の人員配置（最低）基準に定める人員とは別に配置することが必要である。なお、当該事業所に雇用される者が人員配置（最低）基準を満たしていることを前提として、各事業におけるサービス提供の職務に従事しない時間帯において、その者が企業内籍型職場適応援助者の業務に従事することができる。

(1) 就労移行支援事業、就労継続支援B型事業、就労継続支援A型事業（雇用契約無）を実施する事業所において、自らの事業所の利用者に対する支援を実施する場合

障害者雇用関係助成金の受給は不可。雇用関係助成金は、労働者が常用雇用されることや、雇用されている労働者の数や割合に応じて支給されるものであることから、利用者を雇用しない就労移行支援事業、就労継続支援B型事業、就労継続支援A型事業（雇用契約無）の利用者については、受給の対象とはならないものである。

(2) 就労継続支援A型事業（雇用契約有）を実施する事業所において、自らの事業所の障害者に対する支援を実施する場合

ア 障害者雇用調整金・報奨金  
受給可能。

イ トライアル雇用助成金（障害者トライアルコース）（障害者短時間トライアルコースを含む。以下同じ。）

受給不可。本助成金は、適性や業務遂行可能性を見極め、求職者及び求人者の相互理解を促進すること等を目的としており、就労継続支援A型事業の本末業務と近い性格を有するものであることから受給の対象とはならないものであること。

ウ 職場適応訓練費

受給可能。ただし、当該訓練の実施の可否は、職場適応訓練実施要領及び職業訓練受講指示要領の規定に従い個別に判断される。

エ 障害者雇用納付金制度に基づく助成金

a 障害者作業施設設置等助成金、障害者福祉施設設置等助成金

受給不可。就労継続支援A型事業の内容にかんがみ、同事業の本末業務であることから、受給の対象とはならない。

b 重度障害者多数雇用事業所施設設置等助成金

個別判断。当該事業所の経営基盤や対象障害者の雇用条件等が当該助成金の趣旨に合致するものであるか否かによって個別に判断される。なお、木助成金によって設置する施設等については、社会福祉施設等施設整備費の国庫補助対象外であること。

c 重度障害者等通勤対策助成金（通勤援助者委嘱助成金を除く。）

受給可能。ただし、通勤用バス運転従事者の委嘱助成金については、送迎加算に関する届出書を提出している事業所は受給不可。

d 障害者介助等助成金、重度障害者等通勤対策助成金のうち通勤援助者の委嘱助成金

受給不可。就労継続支援 A 型事業の内容にかんがみ、同事業の本來業務であることから、受給の対象とはならないものであること。

オ 特定求職者雇用開発助成金（特定就職困難者コース及び発達障害者・難治性疾患患者雇用開発コース）

受給可能。ただし、平成 29 年 4 月 30 日以前に雇い入れられた利用者であって、暫定支給決定を受けていた利用者については、雇入れ当初において、継続して雇用することが確実であると認められないことから、受給の対象とはならない。

また、就労移行支援事業及び就労継続支援 B 型事業の利用者が、当該サービスを提供した事業所と同一法人内の就労継続支援 A 型事業の実施事業所に雇用される場合には、雇用予約に当たるものと考えられるため、原則、受給の対象とはならない。

カ 特定求職者雇用開発助成金（障害者初回雇用コース）、障害者雇用安定助成金（障害者職場定着支援コース）、障害者雇用安定助成金（障害者職場適応援助コース）の対象となる企業在籍型職場適応援助に係る支給、障害者雇用安定助成金（中小企業障害者多数雇用施設設置等コース）及び人材開発支援助成金（障害者職業能力開発コース）

受給不可。就労継続支援 A 型事業の内容にかんがみ、同事業の本來業務であることから、受給の対象とはならない。

(3) 事業所が、他の事業所の障害者に対する支援を実施する場合

障害者雇用安定助成金（障害者職場適応援助コース）の対象となる訪問型職場適応援助に係る支給について

事業を実施する法人が、訪問型職場適応援助者を配置して、他の事業主に雇用されている障害者を支援させる場合は、受給可能。ただし、同事業所に訪問型職場適応援助者を配置するにあたっては、各事業の人員配置（最低）基準に定める人員とは別に配置することが必要である。なお、当該事業所に雇用される者が人員配置（最低）基準を満たしていることを前提として、各

事業におけるサービス提供の職務に従事しない時間帯において、その者が訪問型職場適応援助者の業務に従事することができる。

(4) 障害者の態様に応じた多様な委託訓練（以下「委託訓練」という。）との関係について

① 就労移行支援事業、就労継続支援 A 型事業（雇用契約無）、及び就労継続支援 B 型事業（以下「就労系事業」という。）の利用者が、当該就労系事業を実施する者以外の委託訓練実施機関において、職業訓練を受講する場合

当該受講に関して、上記就労系事業を実施する者が一定の支援を実施することにより、施設外支援の対象となること。また、受講日以外における就労系事業の利用も訓練等給付費の対象となること。

② 就労系事業の利用者が、当該就労系事業を実施する者自らが受託する委託訓練を受講する場合

当該利用者が委託訓練を受講している期間中は、当該委託訓練を受講していない日であっても、訓練等給付の対象とならないこと。

ただし、当該就労系事業を実施する者が実施する委託訓練が、当該就労系事業に係る事業所以外の事業所で行われている場合など、当該就労系事業と委託訓練に重複が認められない場合には、委託訓練の受講日以外における就労系事業の利用は訓練等給付費の対象となること。

3 就労継続支援 A 型事業（雇用契約有）利用者（雇入者）を募集するため公共職業安定所に求人申込みする場合の留意事項

求人申込みが可能なのは就労継続支援 A 型事業のうち、雇用契約を前提とした利用者（雇用契約有、多機能型の雇用有部分を含む）を募集する場合のみであり、主な留意事項は下記のとおりであること。

なお、求人の中込みにあたっては、このほかにも記入に関する留意点があることから、公共職業安定所とよく相談されたい。

(1) 初めて求人申込みをする際、就労継続支援 A 型事業者である旨の証明（指定通知書等）を正副 1 部ずつ用意し、副本を提出すること。

(2) 公共職業安定所の職業紹介により受け入れた者は、公共職業安定所に提出した求人内容の就労継続支援 A 型事業（雇用契約有）の利用（雇入）を希望していることから、その採用にあたっては、当該法人が運営する他の事業へ振り分けることはできないものであること。

(3) 就労継続支援 A 型事業を利用するにあたっては、原則として暫定支給決定を行うこととされている。暫定支給決定がある場合、求人票の記載内容は暫

定支給決定期間中のものとなることから、暫定支給決定後の雇用条件については、求人票の備考欄に記載すること。

なお、既に暫定支給決定によるアセスメントと同等と認められるアセスメントが行われているとして、市町村が例外的に暫定支給決定によるアセスメントを行わなくても差し支えないと判断する場合は以下の場合である。

- ・ 就労継続支援 A 型利用者が他の市町村に転居し、転居後の市町村においても別の就労継続支援 A 型を利用希望であり、転居前に利用していた事業所から転居後に利用予定の事業所にアセスメント情報が十分に引き継がれている場合
- ・ 就労移行支援利用後に就労継続支援 A 型を利用希望があり、当該就労移行支援事業所から利用予定の就労継続支援 A 型事業所にアセスメント情報が十分に引き継がれている場合

また、暫定支給決定期間中のアセスメント又はそれと同等のアセスメントの結果による解雇の可能性について、求人申込み時に公共職業安定所に伝えるとともに、採用前に障害者本人に伝えること。

- (4) 事業形態や利用料の有無について、求人申込書の備考欄に次のとおり記載すること。

- ① 就労継続支援 A 型事業（雇用契約有）利用料あり
- ② 就労継続支援 A 型事業（雇用契約有）利用料なし

- (5) 就労継続支援 A 型事業は、一定の要件を満たす場合、年齢を問わず利用が可能であるため、求人の申込みにあたっては、年齢については原則として「不問」と記載すること。ただし、就労継続支援 A 型事業の利用にあたっては自治体による支給決定が必要であるため、求人条件に係る特記事項欄又は備考欄に「就労継続支援 A 型事業所への応募にあたっては、お住まいの自治体において、就労継続支援 A 型事業所の利用について支給決定を受ける必要があります」と記載すること。

#### 4 重度者支援体制加算の取扱について

- (1) 重度者支援体制加算について

利用実績の算定については、次によるものとする。

- ① 各月の各日毎の利用者のうち障害基礎年金 1 級受給者の延べ人数を各月毎に算出
- ② 上記①により算出した全ての月の延べ人数を合計（障害基礎年金 1 級受給者の利用者延べ人数）
- ③ 各月の各日毎の利用者の延べ人数を各月毎に算出
- ④ 上記③により算出した全ての月の延べ人数を合計（利用者延べ人数）

- ⑤ ②・④により利用者延べ人数のうち障害基礎年金 1 級受給者延べ人数割合を算出

#### 5 指定障害福祉サービス事業所等とは別の場所で行われる支援にかかる所定単位数の算定について

「障害者の日常生活及び社会生活を総合的に支援するための法律に基づく指定障害福祉サービス等及び基準該当障害福祉サービスに要する費用の額の算定に関する基準等の制定に伴う実施上の留意事項について（平成 18 年 10 月 31 日付け障発第 1031001 号厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部長通知）」の第二の 1 の（4）の取扱については次のとおりであるのでご留意願いたい。

- (1) 企業内等で行われる企業実習等への支援（以下「施設外支援」という。）について

- ① 施設外支援については、次のアからエまでの要件をいずれも満たす場合に限り、1 年間（毎年 4 月 1 日に始まり翌年 3 月 31 日をもって終わる 1 年間とする。）に 180 日間を限度として算定する。なお、この場合の「180 日間」とは、利用者が実際に利用した日数の合計数となることに留意すること。

ア 施設外支援の内容が、当該指定障害福祉サービス事業所等の運営規程に位置付けられていること。

イ 施設外支援の内容が、事前に個別支援計画に位置付けられ、1 週間ごとに当該個別支援計画の内容について必要な見直しが行われているとともに、当該支援により、就労能力や工賃（賃金）の向上及び一般就労への移行が認められること。このため、指定権者においては、就労能力や工賃（賃金）の向上及び一般就労への移行に資するかどうか実地調査においてよく確認すること。

ウ 利用者又は実習受入事業者等から、当該施設外支援の提供期間中の利用者の状況について聞き取ることににより、日報が作成されていること。

エ 施設外支援の提供期間中における緊急時の対応ができること。

- ② トライアル雇用助成金（障害者トライアルコース）

トライアル雇用助成金（障害者トライアルコース）については、下記の要件を満たす場合、施設外支援の対象となること。ただし、本助成金は、就職困難者の再就職を支援するための制度であり、一部の例外を除き職業紹介時点において継続就業中でないことを要件としているため、就労継続支援 A 型事業（雇用契約有）を利用している者は、原則として本助成金の対象とはならないことに留意すること。

ア 上記ア、ウ、エの要件を満たすこと。

イ 施設外のサービス提供を含めた個別支援計画を3か月毎に作成（施設外サービス提供時は1週間毎）し、かつ見直しを行うことで、就労能力や工賃の向上及びトライアル雇用終了後の一般就労への移行に資すると認められること。

③ 施設外支援の特例について

施設外支援については、そのサービス提供期間の上限を年間180日と定めているところであるが、下記の要件を満たす場合、当該期間を超えて提供することが可能であること。

ア 対象者が職場適応訓練を受講する場合であって、上記の要件を満たしかつ当該訓練が訓練受講者の就労支援に資すると認められる場合に限り、当該訓練終了日まで施設外支援の延長が可能であること。

イ トライアル雇用助成金（障害者短時間トライアルコース）であって、個別支援計画の見直しにおいて、延長の必要性が認められた場合であること。

④ 施設外支援の留意事項

ア 同日に施設外支援及び通常の施設利用を行った場合、施設外支援の実施日として扱うこと。

イ トライアル雇用助成金（障害者トライアルコース）については、施設外支援の対象となる要件として個別支援計画の作成及び3か月毎の見直しを行うこととしているが、その取扱いについて以下のとおり行うこと。

- a 個別支援計画の作成及び見直しにおいては、事業所、本人及び関係者が参加の上、協議を行い、必要に応じて公共職業安定所及び受入企業から意見聴取を行い、市町村が必要な内容について判断すること。
- b 個別支援計画の見直しは、都度、実施結果を把握し、延長の必要性や実施内容の見直し等を協議すること。

（例：トライアル雇用助成金（障害者短時間トライアルコース）の実施期間を10か月間とした場合、施設外支援開始時に10か月間全体の到達目標を踏まえた上で3か月目までの個別支援計画を作成し、3か月目にその間の実施結果を見た上で延長の必要性等について協議を行い、延長と判断した場合、個別支援計画を更新し、6か月目までのものを作成する。以降6か月目、9か月目においても同様にを行う。）

(2) 利用者と職員がユニットを組み、企業から請け負った作業を当該企業内で行う支援（以下「施設外就労」という。）について

① 施設外就労（企業内就労）については、次のアからオまでの要件をいずれも満たす場合に限り、算定する。

ア 施設外就労1ユニットあたりの最低定員は1人以上とし、施設外就労の総数については、利用定員を超えないこと。なお、事業所内での就労継続支援B型事業の延長として施設外就労を行う形態ではなく、施設外就労を基本とする形態で就労継続支援B型事業を行う場合であっても、本体施設には、管理者及びサービス管理責任者の配置が必要であること。施設外就労により就労している利用者については、月の利用日数のうち最低2日は、施設外就労先又は事業所内において訓練目標に対する達成度の評価を行うこと。

イ 施設外就労を行うユニットについては、当該施設外就労を行う日の1ユニットあたりの利用者数に対して報酬算定上必要とされる人数（常勤換算方法による。）の職員を配置する。事業所については、施設外就労を行う者を除いた前年度の平均利用者数に対して報酬算定上必要とされる人数（常勤換算方法による。）の職員を配置すること。なお、サービス管理責任者については、施設外就労を行う者の個別支援計画の作成に係る業務も担うことから、施設外就労を行う者を含めた前年度の平均利用者数に対して配置すること。

ウ 施設外就労の提供が、当該指定障害福祉サービス事業所等の運営規定に位置づけられていること。

エ 施設外就労を含めた個別支援計画が事前に作成され、就労能力や工賃（賃金）の向上及び一般就労への移行に資すると認められること。このため、指定権者においては、就労能力や工賃（賃金）の向上及び一般就労への移行に資するかどうか実地調査においてよく確認すること。

オ 緊急時の対応ができること。

② 施設外就労により就労している者と同数の者を主たる事業所の利用者として、新たに受入れることが可能であること。

③ 報酬の適用単価については、主たる事業所の利用定員に基づく報酬単価を適用すること。

④ その他

ア 施設外就労先の企業とは、請負作業に関する契約を締結すること。なお、契約締結の際には、以下のことに留意すること。

a 請負契約の中で、作業の完成についての財政上及び法律上のすべての責任は事業所を運営する法人が負うものであることが明確にされていること。

b 施設外就労先から事業所を運営する法人に支払われる報酬は、完成された作業の内容に応じて算定されるものであること。

- c 施設外就労先の企業から作業に要する機械、設備等を借り入れる場合には、賃貸借契約又は使用貸借契約が締結されていること。また、施設外就労先の企業から作業に要する材料等の供給を受ける場合には、代金の支払い等の必要な事項について明確な定めを置くこと。
  - イ 請け負った作業についての利用者に対する必要な指導等は、施設外就労先の企業ではなく、事業所が行うこと。
    - a 事業所は請け負った作業を施設外就労先の企業から独立して行い、利用者に対する指導等については事業所が自ら行うこと。
    - b 事業所が請け負った作業について、利用者と施設外就労先の企業の従業員が共同で処理していないこと。
  - ウ 利用者と事業所との関係は、事業所の施設内で行われる作業の場合と同様であること。
  - エ 施設の運営規程に施設外就労について明記し、当該就労について規則を設けるとともに、対象者は事前に個別支援計画に規定すること。また、訓練目標に対する達成度の評価等を行った結果、必要と認められる場合には、施設外就労の目標その他個別支援計画の内容の見直しを行うこと。
  - オ 事業所は、施設外就労に関する実績を、毎月の報酬請求に合わせて提出すること。
  - カ 施設外就労に随行する支援員の業務
 

施設外就労に随行する支援員は、就労先企業等の協力を得て、以下の業務を行う。

    - a 事業の対象となる障害者の作業程度、意向、能力等の状況把握
    - b 施設外就労先の企業における作業の実施に向けての調整
    - c 作業指導等、対象者が施設外就労を行うために必要な支援
    - d 施設外就労についてのノウハウの蓄積及び提供
    - e 施設外就労先の企業や対象者の家族との連携
    - f その他上記以外に必要な業務
  - キ 関係機関との連携
 

都道府県及び実施施設は、この事業の実施について、都道府県労働局、地域障害者職業センター、公共職業安定所、委託企業等の関係機関と連携を密にし、事業が円滑に行われるように努めるものとする。
- (3) 在宅において利用する場合の支援について
- ① 就労移行支援事業所又は就労継続支援事業所において、通所利用が困難で、在宅による支援がやむを得ないと市町村が判断した利用者（以下「在宅利用者」という。）に対して就労移行支援又は就労継続支援を提

供するにあたり、次のアからキまでの要件のいずれにも該当する場合に限り、報酬を算定する。

なお、在宅で就労移行支援又は就労継続支援を提供する場合には、運営規程において、在宅で実施する訓練及び支援内容を明記しておくとともに、在宅で実施した訓練及び支援内容並びに訓練及び支援状況を指定権者から求められた場合には提出できるようにしておくこと。その際、訓練状況（在宅利用者が実際に訓練している状況）及び支援状況（在宅利用者に訓練課題にかかる説明や質疑への対応、健康管理や求職活動に係る助言等）については、本人の同意を得るなど適切な手続きを終了上で、音声データ、動画ファイル又は静止画像等をセキュリティーが施された状態で保存し、指定権者から求められた場合には個人情報に配慮した上で、提出できるようにしておくことが望ましい。

ア 通常の事業所に雇用されることが困難な障害者につき、就労の機会を提供するとともに生産活動その他の活動の機会の提供を通じて、その知識及び能力の向上のために必要な訓練その他の必要な支援が行われるとともに、常に在宅利用者が行う作業活動、訓練等のメニューが確保されていること。

イ 在宅利用者の支援にあたり、1日2回は連絡、助言又は進捗状況の確認等のその他の支援が行われ、日報が作成されていること。また、作業活動、訓練等の内容又は在宅利用者の希望等に応じ、1日2回を超えた対応も行うこと。

ウ 緊急時の対応ができること。

エ 在宅利用者が作業活動、訓練等を行う上で疑義が生じた際の照会等に対し、随時、訪問や連絡による必要な支援が提供できる体制を確保すること。

オ 事業所職員による訪問又は在宅利用者による通所により評価等を一週間につき1回は行うこと。

カ 在宅利用者については、原則として月の利用日数のうち1日は事業所に通所し、事業所内において訓練目標に対する達成度の評価等を行うこと。

また、事業所はその通所のための支援体制を確保すること。

キ オが通所により行われ、あわせてカの評価等も行われた場合、カによる通所に置き換えて差し支えない。

- ② 離島等（注）に居住している在宅利用者に対して、就労移行支援又は就労継続支援を提供する場合には、①のオ及びカを次のア及びイとすることができる。

- ア 事業所職員による訪問、在宅利用者による通所又は電話・パソコン等のICT機器の活用により、評価等を1週間につき1回は行うこと。
- イ 在宅利用者については、原則として月の利用日数のうち1日は事業所職員による訪問又は在宅利用者による通所により、在宅利用者の居宅又は事業所内において訓練目標に対する達成度の評価等を行うこと。

(注) 離島等とは次のいずれかの地域とする。

- 一 離島振興法(昭和二十八年法律第七十二号)第二条第一項の規定により指定された離島振興対策実施地域
- 二 奄美群島振興開発特別措置法(昭和二十九年法律第八十九号)第一条に規定する奄美群島
- 三 豪雪地帯対策特別措置法(昭和三十七年法律第七十三号)第二条第二項の規定により指定された特別豪雪地帯
- 四 辺地に係る公共的施設の総合整備のための財政上の特別措置等に関する法律(昭和三十七年法律第八十八号)第二条第一項に規定する辺地
- 五 山村振興法(昭和四十年法律第六十四号)第七条第一項の規定により指定された振興山村
- 六 小笠原諸島振興開発特別措置法(昭和四十四年法律第七十九号)第四条第一項に規定する小笠原諸島
- 七 半島振興法(昭和六十年法律第六十三号)第二条第一項の規定により指定された半島振興対策実施地域
- 八 特定農山村地域における農林業等の活性化のための基盤整備の促進に関する法律(平成五年法律第七十二号)第二条第一項に規定する特定農山村地域
- 九 過疎地域自立促進特別措置法(平成十二年法律第十五号)第二条第一項に規定する過疎地域
- 十 沖縄振興特別措置法(平成十四年法律第十四号)第三条第三号に規定する離島

【参考】 施設外就労と施設外支援の違いについて

	施設外就労	施設外支援
当該支援を実施する職員の要否	要	否 (就労移行支援事業で、移行準備支援体制加算(1)を算定する場合は要)

報酬算定の対象となる支援の要件	<ul style="list-style-type: none"> <li>① 施設外就労を行うユニットについては、当該施設外就労を行う日の1ユニットあたりの利用者数に対して報酬算定上必要とされる人数(常勤換算方法による。)の職員を配置する。事業所については、施設外就労を行う者を除いた前年度の平均利用者数に対して報酬算定上必要とされる人数(常勤換算方法による。)の職員を配置すること。</li> <li>② 施設外就労の提供が、当該施設の運営規程に位置づけられていること。</li> <li>③ 施設外就労を含めた個別支援計画が事前に作成され、就労能力や工賃(賃金)の向上及び一般就労への移行に資すると認められること。</li> <li>④ 緊急時の対応ができること。</li> <li>⑤ 施設外就労により実施する作業内容について、発注元の事業所と契約していること。</li> <li>⑥ 施設外就労により就労している利用者については、月の利用日数のうち最低2日は、施設外就労先又は事業所内において訓練目標に対する達成度の評価等を行うこと。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>① 施設外支援の内容が、当該指定障害福祉サービス事業所等の運営規程に位置づけられていること。</li> <li>② 施設外支援の内容が、事前に個別支援計画に位置づけられ、1週間ごとに当該個別支援計画の内容について必要な見直しが行われているとともに、当該支援により、就労能力や工賃(賃金)の向上及び一般就労への移行が認められること。</li> <li>③ 利用者又は実習受入事業者等から、当該施設外支援の提供期間中の利用者の状況について、聞き取ることににより、口報が作成されていること。</li> <li>④ 施設外支援の提供期間中における緊急時の対応ができること。</li> </ul>
本措置による報酬算定対象	本体施設利用者の増員分 (施設外就労利用者と同数以内)	施設外支援利用者
本体施設利用者の増員	可	不可
施設外でのサービス提供	無	年間180日を限度 (特例の場合、当該期限を超えて)



供期間	提供することも可)
-----	-----------

※本表には、在宅において利用する場合は含まれない。

(別紙)

就労移行支援事業、就労継続支援A型事業及び就労継続支援B型事業（以下、「就労系サービス」という。）の利用者が一般就労へ移行し、訪問型職場適応援助者や企業在籍型職場適応援助者による職場適応援助を利用する場合の留意事項

1 一般就労に移行した障害者に対する支援提供の場合の留意点は（1）のとおりであり、適切に取り扱うこと。

（1）障害者雇用安定助成金（障害者職場適応援助コース）

就労系サービスの利用者が一般就労に移行した場合における職場適応援助については、一般就労先が他の事業主の事業所である場合、訪問型職場適応援助者が支援対象障害者を送り出した法人等に所属する者であるか、それ以外の法人等に所属する者であるかにかかわらず、障害者雇用安定助成金（障害者職場適応援助コース）の対象となりうるとされている。

また、一般就労先が、事業主を同一とする別事業所である場合、支援対象障害者を送り出した法人等に所属する者が、企業在籍型職場適応援助者として職場適応援助を実施することも想定されるが、この場合、要件を満たせば障害者雇用安定助成金（障害者職場適応援助コース）の対象となりうる。

2 1（1）の支援対象となるのは、一般就労に移行した者（障害者雇用安定助成金（障害者職場適応援助コース）の対象となる訪問型職場適応援助に係る支給については、2か月以内に雇い入れられることが確実な者も含む。）であり、施設外支援の基準を満たさないこと（トライアル雇用中に職場適応援助を受ける場合も同じ。）。

3 なお、就労系サービス利用者が地域障害者職業センターの職場適応援助者（配置型職場適応援助者）による職場適応援助を受ける場合についても、2と同様の取扱いとなること。

もんげー  
岡山!

## サービス管理責任者・児童発達支援管理責任者 研修制度の改定について

令和元年度版



※令和元年度サービス管理責任者・児童発達支援管理責任者指導者養成研修資料を一部  
改編

1

### サービス管理責任者・児童発達支援管理責任者養成の現状及び課題

- 現行のサービス管理責任者等を養成するための研修は、1回限りであり、振り返りや更新の機会となる研修等を国としては定めていない。
- こうした現状において、受講者の状況に応じた段階的な研修実施ができておらず受講者の質の担保が困難であることや、更新研修などの機会が設定されていないためサービス管理責任者等の要件を満たした後における質の担保が困難であることが指摘されている。  
(平成24年度障害者総合福祉推進事業「障害福祉サービス事業におけるサービス管理責任者養成のあり方に関する調査」)
- 平成28年度に実施した調査研究事業では、サービス管理責任者等の実務者の業務に対する認識は浸透してきているものの、業務実行状況には個々に大きな差があることが指摘されている。  
(平成28年度障害者総合福祉推進事業「サービス管理責任者等の業務実態の把握と質の確保に関する調査研究事業」)
- 一方で、サービス管理責任者等の確保が困難であるため、サービス管理責任者等の要件である実務経験年数について緩和を求める声も挙がっている。

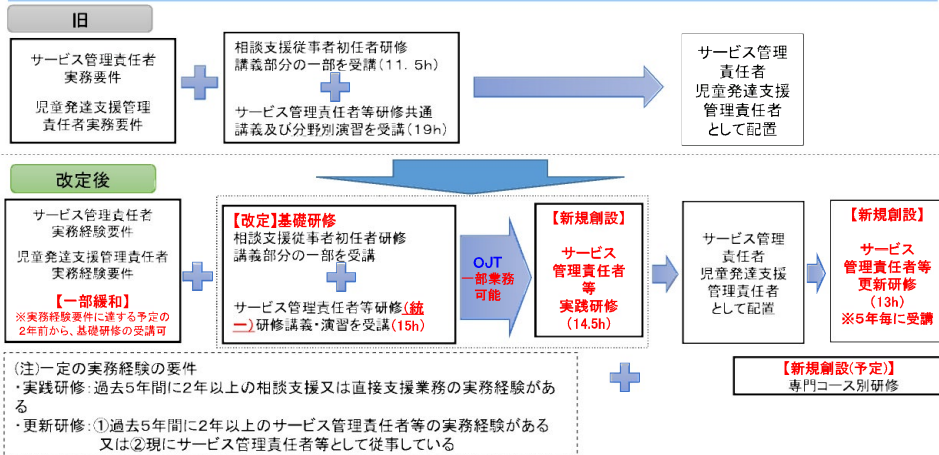


- 上記課題に対応すべく、平成27年度より3カ年で実施した厚生労働科学研究において、新たな研修制度の仕組みに関する研究及びモデル研修プログラムの開発を行った。

2

## サービス管理責任者・児童発達支援管理責任者研修の見直しについて

- 一定期間毎の知識や技術の更新を図るとともに、実践の積み重ねを行いながら段階的なスキルアップを図ることができるよう、研修を**基礎研修、実践研修、更新研修**と分け、実践研修・更新研修の受講に当たっては、**一定の実務経験の要件(注)**を設定。  
※ 平成31年度から新体系による研修開始。旧体系研修受講者は平成35年度末までに更新研修の受講が必要。
- 分野を超えた連携を図るための共通基盤を構築する等の観点から、サービス管理責任者研修の全分野及び児童発達支援管理責任者研修の**カリキュラムを統一し、共通で実施**する。  
※ 共通の知識及び技術に加えて各分野等において必要な知識や技術については、新たに専門コース別研修を創設して補完。
- このほか、**直接支援業務による実務要件を10年⇒8年に緩和**するとともに、基礎研修受講時点において、サービス管理責任者等の一部業務を可能とする等の見直しを行う。  
※ 新体系移行時に実務要件を満たす者等について、一定期間、基礎研修受講後にサービス管理責任者等としての配置を認める経過措置。



3

## サービス管理責任者等として従事するための要件

- サービス管理責任者等として配置されるためには、2つの要件を満たす必要。

障害者総合支援法【サービス管理責任者】 (平成31年度告示第109号)  
児童福祉法【児童発達支援管理責任者】 (平成31年度告示第110号)

### 【1】 実務経験要件 (配置に関する)

・条件により年限が異なる。(次スライド: 詳細は告示を参照。)

① 法、② 保有する資格及び③ 従事経験の業務内容 による。

### 【2】 研修修了要件

- 1) 取得: 基礎研修、実践研修を修了
  - 2) 維持: 実践研修修了の翌年度から5年間の間に1度更新研修を修了
- ◆ 研修受講においても実務経験要件あり。

#### ◆ 研修の受講に関する実務経験要件

- 1) 基礎研修: サービス管理責任者等としての実務経験要件を満たす2年前から受講可。
- 2) 実践研修: 基礎研修修了後2年以上、サービス管理責任者・児童発達支援管理責任者としての一定程度の業務経験。
- 3) 更新研修: ① 過去5年間に2年以上のサービス管理責任者・児童発達支援管理責任者・管理者・相談支援専門員の実務経験。又は② 現にこれらの業務に従事していること。

4

サービス管理責任者として従事するための実務経験要件

業務の範囲	業務内容	実務経験年数			特区 <sup>※3</sup> (大阪・埼玉)		
		国家資格者 <sup>※1</sup>	有資格者 <sup>※2</sup>	左記以外の者	国家資格者 <sup>※1</sup>	有資格者 <sup>※2</sup>	左記以外の者
障害者の保健、医療、福祉、就労、教育の分野における支援業務	(一) 相談支援の業務 日常生活の自立に関する相談に応じ、助言、指導その他の支援を行う業務、その他これに準ずる業務 【告示イ(1)(一)】	3年以上	5年以上	3年以上	3年以上	3年以上	
	a 指定[特定/障害児/一般]相談支援事業、地域生活支援事業の相談支援事業に従事する者 b 更生相談所(身体・知的)、福祉事務所、発達障害者支援センターにおいて相談支援の業務に従事する者 ※旧精神保健福祉法の精神障害者社会復帰施設を含む。 c 障害者支援施設、障害児入所施設、地域包括支援センター、老人福祉施設、介護老人保健施設、介護医療院、精神保健福祉センター、救護施設、更正施設において相談支援の業務に従事する者 d 障害者職業センター、障害者就業・生活支援センターにおいて相談支援の業務に従事する者 e 特別支援学校において相談支援の業務に従事する者 f 医療機関(病院・診療所)において相談支援業務に従事する者で、次のいずれかに該当する者 (1) 社会福祉士主任任用資格を有する者(介護福祉士、精神保健福祉士、研修・講習受講者等) (2) 施設等における相談支援業務、就労支援における相談支援業務、特別支援教育における進路相談・教育相談の業務に従事した期間が1年以上である者 (3) 訪問介護員(ホームヘルパー)2級以上(現:介護職員初任者研修)に相当する研修を修了した者 その他これらの業務に準ずると都道府県知事が認めた業務に従事する者						
(二) 直接支援の業務 入浴、排せつ、食事その他の介助を行い、並びに介護に関する指導を行う業務、その他就業訓練、職業教育に係る業務、身体指導・知識技能の付与・生活訓練・訓練等に係る指導業務 【告示イ(1)(二)】	a 障害者支援施設、障害児入所施設、老人福祉施設、介護老人保健施設及び医療機関等において介護業務に従事する者 b 障害福祉サービス事業、障害児通所支援事業に従事する者 c 病院・診療所、薬局、訪問看護事業所等の従業者 d 障害者雇用事業所において就業支援の業務に従事する者 e 特別支援学校等の従業者 その他これらの業務に準ずると都道府県知事が認めた業務に従事する者	5年以上	8年以上	3年以上	3年以上		

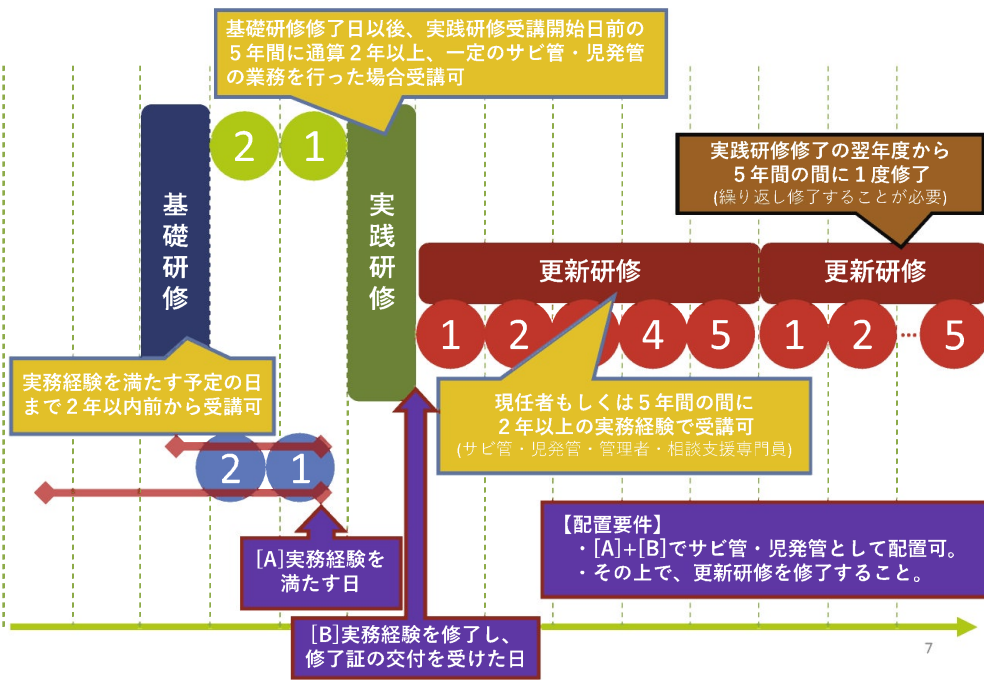
※1 国家資格等とは、医師、歯科医師、薬剤師、保健師、助産師、看護師、准看護師、理学療法士、作業療法士、社会福祉士、介護福祉士、視能訓練士、義肢装具士、歯科衛生士、言語聴覚士、あん摩マッサージ指圧師、はり師、きゅう師、柔道整復師、栄養士(管理栄養士を含む。)、精神保健福祉士のことを言う。  
 ※2 上記(三)の直接支援業務に従事する者で、次のいずれかに該当する者(資格取得以前も年数に含めて可)  
 (1) 社会福祉士主任任用資格を有する者(介護福祉士、精神保健福祉士、研修・講習受講者等)、  
 (2) 保育士、  
 (3) 児童指導員任用資格者、  
 (4) 訪問介護員(ホームヘルパー)2級以上(現:介護職員初任者研修)に相当する研修を修了した者  
 ※3 令和元年度修正予定(一定の経過措置を設ける予定)。

児童発達支援管理責任者として従事するための実務経験要件

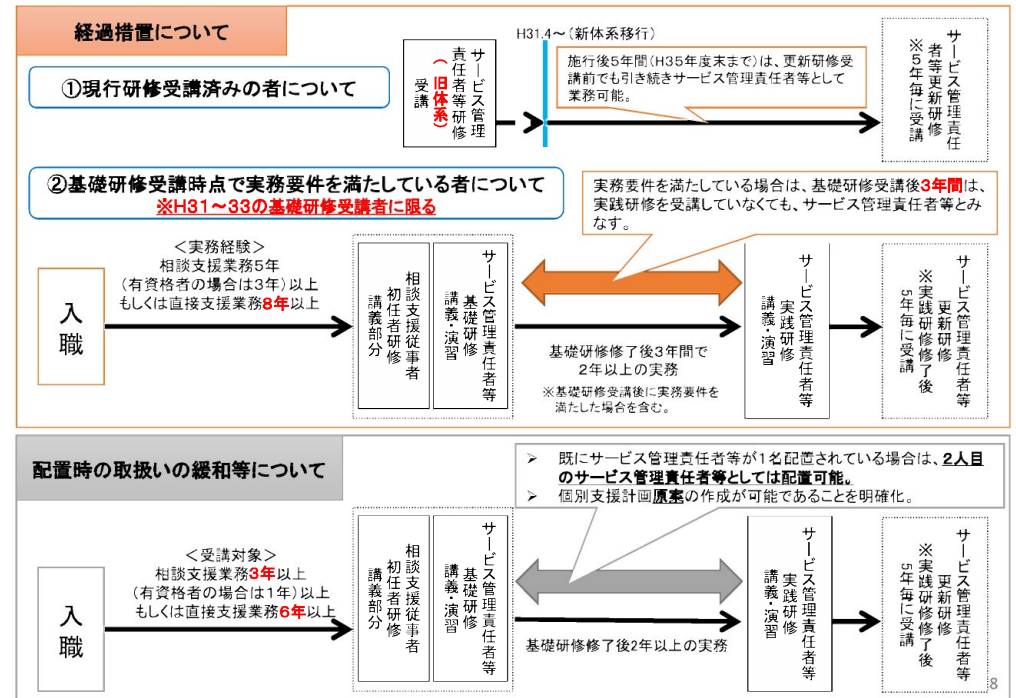
業務の範囲	業務内容	実務経験年数 (下記に加え、老人福祉施設・医療機関等以外での実務経歴が3年以上)		
		国家資格保有者 <sup>※1</sup>	有資格者 <sup>※3</sup>	それ以外の者
障害者(身体上若しくは精神上の障害があること又は環境上により日常生活を営むのに支障がある者)又は障害児(児童福祉法第4条第1項に規定する児童)の保健、医療、福祉、就労、教育の分野における支援業務 【告示イ(1)(一)】	(1) 指定[特定/障害児/一般]相談支援事業、地域生活支援事業の相談支援事業に従事する者 (2) 児童相談所、児童家庭支援センター、更生相談所(身体・知的)、福祉事務所、発達障害者支援センターにおいて相談支援の業務に従事する者 ※旧精神保健福祉法の精神障害者社会復帰施設を含む。 (3) 障害者支援施設、児童入所施設(障害児入所施設、乳児院、児童養護施設、児童自立支援施設)、地域包括支援センター、老人福祉施設、介護老人保健施設、介護医療院、精神保健福祉センター、救護施設、更正施設において相談支援の業務に従事する者 (4) 障害者職業センター、障害者就業・生活支援センターにおいて相談支援の業務に従事する者 (5) 学校において相談支援の業務に従事する者 (6) 医療機関において相談支援業務に従事する者で、次のいずれかに該当する者 1) 社会福祉士主任任用資格を有する者(介護福祉士、精神保健福祉士、研修・講習受講者等) 2) 施設等における相談支援業務、就労支援における相談支援業務、特別支援教育における進路相談・教育相談の業務に従事した期間が1年以上である者 3) 訪問介護員(ホームヘルパー)2級以上(現:介護職員初任者研修)に相当する研修を修了した者 その他これらの業務に準ずると都道府県知事が認めた業務に従事する者	3年以上	5年以上	5年以上
	(一) 相談支援の業務 日常生活の自立に関する相談に応じ、助言、指導その他の支援を行う業務、その他これに準ずる業務 【告示イ(1)(一)】 □ 直接支援業務 入浴、排せつ、食事その他の介助を行い、並びに介護に関する指導を行う業務、その他就業訓練、職業教育に係る業務、身体指導・知識技能の付与・生活訓練・訓練等に係る指導業務 【告示イ(1)(二)】			
	(1) 障害者支援施設、児童入所施設(障害児入所施設、乳児院、児童養護施設、児童自立支援施設)、老人福祉施設、介護老人保健施設及び医療機関等において介護業務に従事する者 (2) 障害福祉サービス事業、障害児通所支援事業、保育所、認定こども園、老人居宅介護等事業等に従事する者 (3) 病院・診療所、薬局、訪問看護事業所等の従業者 (4) 障害者雇用事業所において就業支援の業務に従事する者 (5) 学校等の従業者 その他これらの業務に準ずると都道府県知事が認めた業務に従事する者	5年以上	8年以上	8年以上

※1 上記イの相談支援業務及び上記②の介護等業務に従事する者で、国家資格等<sup>※2</sup>による業務に5年以上従事している者(国家資格の期間と相談・介護業務の期間が同時期でも可)  
 ※2 国家資格等とは、医師、歯科医師、薬剤師、保健師、助産師、看護師、看護師、理学療法士、作業療法士、社会福祉士、介護福祉士、視能訓練士、義肢装具士、歯科衛生士、言語聴覚士、あん摩マッサージ指圧師、はり師、きゅう師、柔道整復師、栄養士(管理栄養士を含む。)、精神保健福祉士のことを言う。  
 ※3 上記ロの直接支援業務に従事する者で、次のいずれかに該当する者(資格取得以前も年数に含めて可)  
 1) 社会福祉士主任任用資格を有する者(介護福祉士、精神保健福祉士、研修・講習受講者等)  
 2) 保育士  
 3) 児童指導員任用資格者  
 4) 訪問介護員(ホームヘルパー)2級以上(現:介護職員初任者研修)に相当する研修を修了した者

サービス管理責任者・児童発達支援管理責任者の配置要件と研修受講要件



サービス管理責任者等の研修見直しに伴う経過措置及び配置時の取扱いの緩和等について



## サービス管理責任者・児童発達支援管理責任者研修の位置付け

### 基準省令

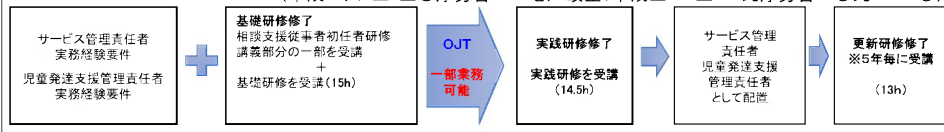
指定障害福祉サービスの事業等の人員、設備及び運営に関する基準(平成一八・九・二九厚労令一七一)  
 指定障害者支援施設等の人員、設備及び運営に関する基準(平成一八・九・二九厚労令一七二)  
 指定通所支援の事業等の人員、設備及び運営に関する基準(平成二四・二・三厚労令一五)  
 指定障害児入所施設等の人員、設備及び運営に関する基準(平成二四・二・三厚労令一六)  
 (従業者)

○指定療養介護事業ごと利用者の数の区分に応じ、**サービス管理責任者を配置する。**

○児童発達支援管理責任者 一以上

### 告示

サービス管理を行う者として厚生労働大臣が定めるもの等(平成一八・九・二九厚労告五四四)  
 障害児通所施設又は障害児入所支援の提供の管理を行う者として厚生労働大臣が定めるもの  
 (平成二四・三・三〇厚労告二二七/改正:平成三一・三・二九厚労告一〇九・一一〇)



### 通知

サービス管理責任者研修事業の実施について(平成一八・八・三〇 障発〇八三〇〇四)

○サービス管理責任者研修

○児童発達支援管理責任者研修

都道府県等による初任者及び現任研修は  
**標準カリキュラム以上の内容**で実施する。

## サービス管理責任者・児童発達支援管理責任者研修の告示別表

相談支援従事者初任者研修講義(現行)		時間数
講義	障害者の日常生活及び社会生活を総合的に支援するための法律及び児童福祉法の概要並びに相談支援従事者の役割に関する講義	6.5h
	ケアマネジメントの手法に関する講義	2h
	地域支援に関する講義	3h
合計		11.5h

基礎研修(うち相談支援従事者初任者研修講義部分)		時間数
講義	1 障害者の地域支援と相談支援従事者(サービス管理責任者・児童発達支援管理責任者)の役割に関する講義	5h
	2 障害者の日常生活及び社会生活を総合的に支援するための法律及び児童福祉法の概要並びにサービス提供のプロセスに関する講義	3h
	3 相談支援におけるケアマネジメント手法に関する講義	3h
合計		11h

共通講義及び分野別演習(旧)		時間数
講義	サービス管理責任者の役割に関する講義	6h
	アセスメントやモニタリングの手法に関する講義	3h
演習	サービス提供プロセスの管理に関する演習	10h
合計		19h

基礎研修(うち研修講義、演習部分)(改正後)		時間数
講義	1 サービス管理責任者の基本姿勢とサービス提供のプロセスに関する講義	7.5h
演習	2 サービス提供プロセスの管理に関する演習	7.5h
合計		15h

### 新設

実践研修		時間数
講義	1 障害福祉の動向に関する講義	1h
	2 サービス提供に関する講義及び演習	6.5h
講義・演習	3 人材育成の手法に関する講義及び演習	3.5h
	4 多職種及び地域連携に関する講義及び演習	3.5h
合計		14.5h

更新研修		時間数
講義・演習	1 障害福祉の動向に関する講義	1h
	2 サービス提供の自己検証に関する演習	5h
	3 サービスの質の向上と人材育成のためのスーパービジョンに関する講義及び演習	7h
合計		13h

※実践研修は令和元年度の2年後より実施

※1 更新研修は、令和元年度から実施

※2 令和5年度までは1及び2のみの実施でも可とする